序に代えて

一般社団法人倫理研究所倫理文化研究センターは、平成三十（二〇一八）年八月二十四日から二十五日にかけて、「第二回倫理文化研究センターシンポジウム」を開催しました。本書『自然と人間』（倫理文化研究叢書7）は、その内容をまとめ、書籍化したものです。

倫理文化研究センターが、「生と死」という全体テーマで第一回目のシンポジウムを開催したのは、平成二十七（二〇一五）年九月でした。これは「倫理文化研究センター発足記念」として開催したもので、その内容は単行本の『生と死』（倫理文化研究叢書6）に収められています。

今回のシンポジウムは、全体テーマを「自然と人間」として開催しました。

古来、自然という言葉は、人工の加わらないあるがままの状態としての自然や人間を取り巻く生態系としての天地自然などの意味に解釈されてきました。後には、文学や芸術における自然主義、人の生き方や心のあり方としての自然、自然と人間との共生など、人々の人生観や思想を表現する言葉としても使われるようになりました。いずれにしても、自然は人間生活と深い関わりをもっています。

ところで近年、社会で注目されていることとして、環境破壊や大規模災害、人工知能の発達や、仮想通貨をはじめとするバーチャルリアリティ（仮想現実）の登場、日進月歩の医療の発展や安楽死等々、自然またはその対極である人為・人工的な事象が多くあります。

このように、私たちの生活が多くの人工的なもので囲まれている今日、自然と人間との関わりについて再

考し、その研究成果を発信することは、私たちがこれからどのように生きていけばよいかという問題についての理解と認識を深める上で大いに意義のあることではないかと考え、「自然と人間」を全体テーマとしました。

全体テーマのさらに詳しい意義については、本書の総合討論を参照していただくことにして、ここでは本書の構成と内容について述べておくことにします。

本書の第一部には、八名の研究者の論文を掲げました。

「自然」という語は先ほども少し触れたように様々な意味で用いられていますが、まず想像するのは、生い茂った木々の中で、動物や昆虫が暮らしている「場」のイメージでしょう。このような意味での自然は、生態系と言い換えられるかもしれません。内田智士による『**自然界における協調と競争**』は、自然界において、動物たちが生存競争を行う一方で、互いに絶滅しないような協調的関係を結んでいることを、数理モデルにより明らかにしています。また、人間が自然界の中で特別な地位を獲得した理由を、人間の想像力が可能にする「大規模な協調」の中に見出し、それが達成されるメカニズムについて、詳しい考察を行っています。

「自然」という言葉には、「人工」と対比される「自然」という側面があります。その視点から自然と人間について考察したのが、高橋徹の『**生物圏における時間と人間—自然時間の回復に向けて**』で、自然と人間との関係を、特に時間の観点から論じています。論考では、地球の生物圏の中に生きる人間が、自然のリズムとは無関係な暦と機械時計を併用することで、自然と調和しない文明が形づくられたという前提のもと、

自然時間と人工的な時間が比べられています。自然と調和して生きるには、これらの対比を通して、自然時間を自覚することが、現代の私たちに求められていると主張しています。

高橋論文と同様に、「自然との調和」という観点から書かれたのが、松本亜紀による『**伊豆諸島一離島における「自然と人間」の共生のあり方—青ヶ島の事例から**』です。そこでは、伊豆諸島の最南端に位置する青ヶ島における、独自の巫俗に注目し、ダンシン（乱心）と呼ばれる、ミコ（巫女）の神事中の神懸りや託宣を取り上げています。ダンシンは、先行研究では精神錯乱として出現するものと説明されてきましたが、著者の調査によって、ダンシンという表現は、一般島民によって日常の様々な場面で用いられていることが判明しています。そこで本論文では、その意味するところを、島民の語りから抽出することを目指していますが、考察の結果、日常的に「カミサマとのつながりを感じられるようなダンシンを積み重ねる」ことを意識した生活を送ることの重要性が、島民に共有されてきたことが明らかとなっています。また、そのような認識のあり方が「自分と自分以外の存在が切り離されていない」という感覚を育み、自然との共生を図るうえで重要な役割を果たしていることも同時に判明しています。この結果を踏まえて、人間も自然の一部であるという感覚を取り戻すことが重要であると結論付けています。

ところで、中国の儒学には、天人合一、すなわち自然と人間、人間と万物はみな合一の存在であるという思想がありますが、この思想の考察を試みたのが李致億による『**儒学思想における自然と人間の一致—天人合一**』です。天人合一は自然（天）と人間の属性が、基本的に一致するという思想ですが、紀元前二二一年以前の中国先秦時代の儒学者たちは、自然の属性を特に「誠」という単語で表現しました。誠は真実無妄

な、自然の神妙な変化や動きを意味します。そして人間は、生まれつきその属性を与えられ、それに法り、それを実現するように宿命づけられた存在とされていました。性理学（世界や人間の本性を論究する学問）の時代に入ると、世界と人間との解釈は「理気」という概念を用いてなされてきました。「理」は形而上の原理を意味し、「気」は形而下の物質を指します。そのような中で、人間は理の面でも、気の面でも、自然の中に存在し、自然と合一した存在であると捉えられてきたことが、本論文で明らかにされています。

平良直の『**自然と人間、その断絶と連続**』は、「自然」の意味を「マクロコスモス」と捉えて書かれた論文です。本論文では、自然と人間との間には断絶がありつつも、自然の摂理（宇宙的秩序）の中に生かされている人間が、自然とつながりながら生きてきたことを、諸宗教伝統の事例を通して見ています。本論文では先ず、人間と自然との関係を、聖なるものの体験という次元から検討しています。特に自然と関連した聖なるものの顕れや力の顕現が論じられ、それが、自然が圧倒的に人間を超えたものであることを実感させる役割を果たしていることが導き出されています。さらに、自然の力を利用した生き方の例として都市国家を取り上げています。都市国家は、自然との断絶によって誕生したと言われていますが、自然の秩序、すなわちマクロなコスモスと無関係だったわけではなく、ミクロなコスモスである都市国家はむしろ自然の秩序を範型として形成されてきたことが指摘されています。このようなマクロコスモスとミクロコスモスの照応関係を、様々な事例を通じて見ています。

野中寛治による『**日本人の暮らしと祭り—保田與重郎の自然（かむながら）の思想**』は、日本人の自然観について多くの文章を書いている昭和時代の文芸批評家・保田與重郎の思想を考察したものです。古来、日本には、「神

ながらの道」と表現される思想があり、それは「神の道にしたがう」「神の意のままに生きる」などと理解されてきました。「神の意のままに」とは、人間のさかしらや計らいを少しも加えないことですが、保田與重郎は、「自然」と書いて「かむながら」と訓ませ、自然とは、日本本来のことばでかむながらという、と述べています。本論文では、保田が「自然」と書いて「かむながら」と訓ませたのはなぜなのかを考察することにより、保田のいう自然（かむながら）の思想に現れている日本人の自然観や道徳観について明らかにしています。合わせて、絶対の調和と平和を希求する上においては、保田の自然（かむながら）の思想は真剣に吟味されるべき思想であることを指摘しています。

寛ボルテールの『**自然を食べる**』は、食文化というコンテキスト（分野）における「自然」の概念を考察する論文です。本論文では、イタリアから始まったスローフード運動やフランスで使われてきたテロワールの概念（土壌を意味する概念）を取り上げ、食習慣を自然へと立ち返らせることを提唱する近年流行の社会運動や食事法についての考え方、すなわち食文化における「自然回帰」を検証することで、そこにおける「自然」の捉え方を検討、分析し、現代食文化における「自然」という概念の機能、そしてそれが及ぼす影響について論考を進めています。

最後の水野雄司の『**「花鳥風月」とアイデンティティ**』では、日本文化における「自然」とは何かが探究されています。本論文では、日本人の「自然」について、海外から、次のような問いが投げかけられることがあるとしています。それは、日本では庭園や公園、盆栽など、人工的なものに対しても「自然」という言葉が使われる、という疑問です。その問いに答えるために、本稿では「象徴としての自然」を表している

と考えられる「花鳥風月」という言葉に着目しています。具体的には、日本の古典文学から江戸時代の「物のあはれ」までを渉猟しながら、その中に「花鳥風月」を探ることで、先の問いに答え得る、日本人の「自然」が探られています。

なお、以上八名のほかに、三浦貴史が『「自然な心」の発動による「指導」についての考察』のテーマで研究発表を行いましたが、研究ノートに近い発表内容であるため、論文としての本書への掲載は行いませんでした。

第一部の論文集に続くのが、本書第二部の総合討論です。

総合討論では、総合司会者の丸山敏秋が「自然と人間」というテーマの意義を再確認し、各研究者の発表を総括したあと、それぞれの発表内容の共通点と違いについて検討が行われました。そしてその後は、自然という語の多義性を踏まえた上で、これから人は自然と関わりあいながらどのように生きたらよいか、どう生きるのが望ましいかということに焦点を絞り討論を行いました。

討論の後半では、「自然と人間」というテーマについて、それぞれの研究領域からさらに研究を深めていくならばどのような課題が考えられるかについて討議を進めました。総合討論をお読みいただければ、第一部の研究論文の理解もより深まるのではないかと思います。

ところで本書には、特別論考として、一般社団法人倫理研究所二代目理事長丸山竹秋の『**自然と人間―自然の秩序と法則**』を掲載しています。

本論考は、著者が、東京電機大学、城西大学、東京農業大学等の講師（哲学・倫理学担当）を務めていた

おりに、大学での講義資料として執筆されたもので、昭和四十六（一九七一）年に自費出版という形で刊行されました。

論文の大きな特徴の一つとして、「自然」として考察されている内容が、動物・植物・鉱物・空間・時間・数字など多岐に亘ることが挙げられます。さらに、本論考の内容が時代を先取りしたものであることにも注目すべきでしょう。当時は研究者などの関心も薄かった事柄で、その後にアカデミックな場で着目されるようになった項目が各所に見られます。

例えば、全てのものはつながっていて、統一されているという視点が貫かれていますが、この視点は後に流行する複雑系や複雑ネットワークの理論に通じるものがあります。本論文にはあるいは、現時点では注目されていないけれども、今後、注目されることになる視点や概念がまだ隠れているかもしれません。

「自然と人間」というテーマの捉え方は、研究分野や研究者によって様々です。しかしながら、二日間のシンポジウムを通して、少なくとも「自然と人間」の問題が、思いのほか広く深いものであることが、参加者の間で共有されたことは事実です。本書が、読者の皆様にとって、「自然と人間」との関係を考える契機となれば幸いです。

令和元年七月

一般社団法人　倫理研究所

目次

目次

序に代えて …… 1

第一部　「自然と人間」研究発表 …… 15

第一発表　自然界における協調と競争　内田智士 …… 16

はじめに／食物網／食物網の複雑さ
食物網の安定性に関して知られていること／理論モデルからの帰結
生態系における競争と協調／協力・協調の難しさ
協調関係形成のメカニズム／一般的信頼と協調関係
公正世界信念と一般互恵的協調／おわりに

第二発表　生物圏における時間と人間
——自然時間の回復に向けて　高橋　徹 …… 49

はじめに——自然時間を取り戻すために
1．生物圏と暦、暦と月
2．時間と生物——自然時間（生物時間）とは何か？
3．目に見えない魂の働きと、「時の輪」
4．人間固有の時間のとらえ方
5．結語——自然は人間の調和的な関与によって存続し、変化する

第三発表　伊豆諸島一離島における「自然と人間」の共生のあり方
――青ヶ島の事例から　**松本亜紀**……74
はじめに――本稿の目的
1．青ヶ島の神事の特徴
2．事例
3．考察

第四発表　儒学思想における自然と人間の一致――天人合一　**李　致億**……96
はじめに
1．天の意味
2．天と人のつながり――「誠」
3．性理学の天人合一論
4．天人合一の実現
おわりに

第五発表　自然と人間、その断絶と連続　**平良　直**……132
はじめに
1．自然のヒエロファニー
2．原初的なコスモスの体験と知覚――天空と天体のヒエロファニー
3．コスモゴニー（宇宙創成神話）と人間
4．狩猟民族における自然と人間
5．聖なるものと古代都市
6．結語にかえて

第六発表　日本人の暮らしと祭り——保田與重郎の自然（かむながら）の思想　野中寛治……169
はじめに
1．まことの日本のいのちとしての自然（かむながら）
2．「ことよさし」に仕へ奉る日本人の暮らし
3．人道の根源としての自然（かむながら）
4．神・皇・民を一貫する米作りの暮らし
5．暮らしが作る永遠の日本と平和
おわりに

第七発表　自然を食べる　寛ボルテール……205
はじめに／スローフード
スローフードの理念／テロワール
テロワールから地理的表示へ／農業と自然
農業革命以前の「自然食」／最後に

第八発表　「花鳥風月」とアイデンティティ　水野雄司……230
はじめに
「思ひやり」—『うつほ物語』
「らむ」—『古今和歌集』
「菊」と「藤」—『源氏物語』『栄花物語』
「栖」—『方丈記』
「変化の理」—『徒然草』
「物のあはれ」—本居宣長
おわりに

第二部　「自然と人間」討論　265

特別論考　自然と人間――自然の秩序と法則　丸山竹秋　305

自然界の統一／健康を維持する統一力
肉体を守る生命力／統一があるから分類できる
光合成による統一的扶序／食物連鎖・鉱物など
物理学と法則／物質と宇宙
すべてのものは有理数と関係する／位置と空間
相互関係の原理／不統一と統一
時間と人間／時間における影響